

〔海外研修地視察報告〕

## 科目『国際看護学海外研修』開講のための視察報告

奥田泰子, 河野保子, アダラー・コリンズ・慈観

人間環境大学松山看護学部

人間環境大学松山看護学部では、「グローバル化する社会で活躍できる国際感覚を身に付けた看護人材の育成」を教育の特色の一つに掲げ、1年次および2年次に「国際看護学」を必修科目として開講している。それらの科目を受講したうえで、さらに国際感覚を身に付けたい学生のために、2年次の夏季休暇中に「国際看護学海外研修」を選択科目として開講している。本学部は、平成29年度に開学し、一期生の中には、国際看護学が学べることに魅力を感じて入学した学生もあり、その期待に応え、安全でより良い学びができる研修内容を準備する必要があった。そこで、科目担当教員、学部長とともに、研修候補の中国の『上海中医薬大学』国際教育学院を視察したので報告する。

### 1. 出発までの取り組みと上海到着まで

科目担当教員（慈観教授）が、先方との連絡調整を行い、平成30年3月5日に訪問した。本学部にとって最初の国際交流であり、訪問時に渡す資料として「フラッグ」と英語版リーフレットを作成した。慈観先生の発想で、「フラッグ」の意匠が決まり、出発までに製品化（写真1）し、本学の英語版紹介冊子も作成した。旅行会社を通じて旅程が決まり、3月3日（土）17:20松山空港発の便で羽田空港に到着、翌日、10:00に羽田国際空港を出発して、一路上海「虹橋（ホンチャオ）」空港に向かった。1時間の時差のため、実質約3時間半のフライトであった。

### 2. 上海「虹橋空港」到着（3月4日（日））

中国は世界で最も人口の多い国であり、到着するまでは「きっと空港内ロビーは、人でごったがえしているだろうな」と思っていたが、意外にも静かで、入国手続きもスムーズ、心配することは全くなかった。出口には、日本の旅行会社から委託された現地のガイドが我々の到着を待っていた。ガイドの日本語は大変堪能であり、また我々の希望に細かく気を配り、とても丁寧な対応で、次に上海に来ることがあればひとと彼にまたガイドをお願いしたいと思ったほどである。今回、学生の海外研修計画を検討するための事前訪問であるが、学生は学修だけではなく、海外の文化に触れるためには観光も必要との考えから、ホテルに着く前に上海で有名な観光地を視察することにした。

### 3. 観光地の視察

上海は、中国第2の都市であり、古くから海外との交流

拠点の要所である。日本の企業もたくさん進出し経済発展を遂げている、一方、古い歴史を引き継いでいるところもある。上海の人口は約2,400万人で中国の都市の中で2番目の人口を誇っている。都市といっても面積は広く、日本では一つの県レベルの広さらしい。新しさと古い歴史の両面を持つ上海にはいくつかの観光名所があるが、研修予定大学との位置関係から考え、「豫園（ヨエン）」（写真2）を視察することにした。

空港から「豫園（ヨエン）」に向かい、マイクロバスを降りると、人、人、人の群れで、うっかりするとその波に流されてしまいそうな雰囲気であった。ガイドは、すぐさま「スリに注意してください」、「バッグは前で抱えてください」と我々に注意した。日本はどこに行っても安全で個人の危機管理が甘いため、海外旅行ではスリの標的にされやすい。海外に出ることで日本の国の安全性を学生たちも感じるのではと思った。「豫園（ヨエン）」は、明時代の美しい庭園であり、その周辺には土産物店がたくさん並んでいた。人の波で、「美しい庭園」を感じることもなく、ガイドからはぐれないようにと気を配りながら歩くのが精一杯であった。松山ではこんな人混みはないというほどの人の波にほとんど疲れたので、庭園の中で中国茶をいただける場所へ連れて行ってもらうことにした。人の波をかき分け、どこをどう歩いたのかもわからない状態であったが、建物の3階につれていかれた。そこから眺めた景色は、一方は歴史的建造物、もう一方には近代的高層ビル群が見え（写真3）、中国を象徴するような景観であった。観光地には、御多分にもれず日本人観光客の集団が沢山おり、その茶房にも20名程度の日本人団体客がお茶を飲んでいた。中国茶はウーロン茶ぐらいしか知らなかったが、さすがお茶発祥の国の中国茶は多種多様で、発酵の種類によって色も味わいも異なり、花茶と言ってジャスミンやバラの香りのするお茶などを試飲した。学生たちにとって、この観光地を訪れて歴史的庭園の見学や中国茶の文化に触れることは、日本ではできない異文化体験になると思い、安全に観光ができる方法を模索したいとの思いに至った。

### 4. 大学訪問

3月5日（月）、訪問先である「上海中医薬大学」はホテルから車で約1時間かかる場所であり、9時に訪問の

約束をしていたため、早朝にマイクロバスでホテルを出発した。高速道路は車の渋滞が激しく、車線変更をするのが一苦勞である。日本でも車線変更する時、なかなか入れてもらえないこともあるが、中国ではもっと酷い。ぶつかりそうになりながら強引に入らないと目的地には到着できない状況であった。道路わきに大学のものらしき旗が何本も立てられていたので大学付近であるのがわかった。しばらく校内を走ると、キャンパスの一角に目的の「国際交流センター」(写真4)があった。この後、本学部の研修についての話し合いを行うことになるが、その前に訪問先の大学について概要を紹介する。

#### 1) 上海中医薬大学

上海中医薬大学の前身である上海中医学院は、1956年に創設された中華人民共和国が最初に開講した中国伝統医学大学4校の一つである。当校の原点は、1917年に設立された上海中医専門学校に遡ることができる。1993年に上海中医薬大学と改名し、2003年に上海市浦東新区張江科学技術園内に校舎を移転、敷地面積37万㎡の広大なキャンパスを持つ。

大学には医学部、薬学部、鍼灸推拿学部、看護学部、国際教育学院、保健医療学部、健康福祉学部などの学部が設置されており、在校生は約8,000名であった。また大学の付属病院として、龍華病院・曙光病院・岳陽病院・上海中医病院など8か所を擁し、外来患者数は1日平均5万人にのぼるとのことであった。

中医薬大学は、現在、教授700人以上で構成され、中国科学院会員と中国工程院会員の計3人、全国的に最高水準の中医薬専門家76人、上海市名中医64人を有している。「優秀性、専門性、実力性」を建学理念とし、「教育研究型、特色型、国際型」に特化し、上海中医薬大学は全国一流、世界有数の中医薬高等教育機関を目指して時代とともに努力し続けている(上海中医薬大学のご案内より一部改変)。

#### 2) 国際教育学院

上海中医薬大学の学部の一つである国際教育学院は、留学生向けの中国伝統医学と中国語の学習を行う教育機関として、各国の実情やニーズに応じた人材を育成している。現在は世界20数か国から留学生(語学、本科生、修士、博士、研修生)が約1000人以上在学している。そのほか、日本、韓国、ロシア、フランス、イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリアなど30数か国からの短期留学生は毎年約1,300人で、学院が設置されて20余年間、世界の100か国および地域から入学した多数の中医人材を養成した。

国際教育学院には、WHOに委託されて設立した国際鍼灸センターがあるほか、国際伝統医学教育センター、中国語教育センター、留学生養成センターを設置しており、授業は日本語、英語、フランス語、韓国語、中国語など多言語で行われている。当院は留学生向け中国語、中医学、薬

膳、解剖、鍼灸、推拿、気功など各科目を設置している(国際教育学院のご案内より一部改変)。

### 5. 研修についての協議

表1 Schedule on Marth 5th

Time	Address	Agenda
9:00 ~ 11:00	The meeting room of international education college 2th floor	The detail cooperation (Visit fees, learning and visit contents, and agenda)
11:00 ~ 11:30	Shanghai Museum of TCM (The museum of our University is the best TCM museum in China)	Visit the shanghai Museum of TCM (Which may be one of the visit agenda of your students in September)
11:30 ~ 12:30	Lunch time	We will arrange a simple lunch in our dining hall.
13:00 ~ 14:00	Shuguang Hospital affiliated to SHUTCM	Visit the center of Traditional Chinese Medicine
15:00 ~ 16:00	Shanghai traditional Chinese medicine hospital	Visit the outpatient department of TCM in nursing (The two hospitals will provide of clinical practice in September)
16:00 ~	Return to the hotel	

上海中医薬大学訪問に先立ち、「国際看護学海外研修」科目担当者と上海中医薬大学との連絡調整により、我々が訪問する当日のスケジュールが準備され(表1)、それに従って実施された。

### 6. 協同の詳細

上記スケジュール通り、2018年3月5日(月)9:00~上海中医薬大学の国際交流センター2階会議室において、本学学生の研修受け入れに関する協議を行った。

上海中醫薬大学の出席者(写真5)

1. 国際教育学院 院長 Lin Xun 主任医師
2. 国際教育学院 Han Chouping 副教授(英語専門)
3. 国際教育学院 CHU Guixian 主任医師(日本語堪能)
4. 国司愛両学院 Yan Huan 日本語科 助教(日本語堪能)

5. 看護学院 Zhang cui-di 副院長 看護学部長

6. 看護学院 Liao Xiao Qin 副教授(学科長)

7. 国際教育学院 Zhang Wei 短期研修事務管理部 主任

人間環境大学松山看護学部からは、学部長 河野保子、学科長 奥田泰子、国際看護学 教授 アグラール・コリンズ・慈観が出席した。林院長より下記の挨拶があった。

「3月5日は、当学院の春学期初日であり、この日に人間環境大学松山看護学部から先生方をお招きすることは何かの縁を感じます。当大学は、大阪に分校があり、また、年間500人程度の日本の学生を長期・短期研修で受け入れている実績があります。今まで受け入れてきた職種は、医

師、薬剤師、柔道整復師や鍼灸師であり、看護学生の受け入れは初めてとなります。本日は、松山看護学部の研修希望内容や費用面などについて話し合いをしたいと思います」

この林院長の挨拶のあと、参加者の自己紹介を行い、具体的な話し合いに入った。日本語、英語、中国語が入り混じった、にぎやかで和やかな雰囲気での話し合いが行われ、その結果、研修内容が計画された(表2)。その他、費用や宿泊に関しても詳細なご提案をいただき、帰国後、松山看護学部内で最終決定をした上で、研修を具体化することになった。その後、研修内容に含まれている博物館および病院の視察を日本語が堪能な日本語科助教のYan Huanの案内で行った。途中で学生の宿泊場所となる上海中醫薬大学推薦のビジネスホテルも確認したが、安全かつ安価であり、他国の学生も宿泊しており、交流もできる環境であることを確かめた。

表2 研修(5日間)のスケジュール(案)

研修日	月・日	曜日	AM	PM
1日目	9月3日	月	松山⇒上海入国	
2日目	9月4日	火	中国伝統医学についての概説 中国の看護教育カリキュラムなど (講義)	アクティビティ ラーニング漢方薬、鍼灸など (講義)
3日目	9月5日	水	病院見学(2か所) 西洋と東洋医学混合病院 東洋医学の病院 いずれも学院の附属病院	実技演習 マッサージなど 実技演習後に中国と日本の文化交流(太極拳と日本の踊り?)
4日目	9月6日	木	市内観光	
5日目	9月7日	金	帰国	

*Report on arranging a co-operation for student-nurses to visit as part of their course in international nursing course. Journal of Nursing Science in Human Life, 1: 44-47 (2018). Yasuko Okuda, Yasuko Kawano and Jikan Adler-Collins (Working group for training international nursing course, Faculty of Nursing at Matsuyama Campus, University of Human Environments).*

## 7. 中国伝統医学の上海博物館を訪問

学生の研修内容として検討するための一つとして、キャンパス内にある中国国内で有名な中国伝統医学の博物館を見学した(写真6)。日本の多くの博物館が月曜日を休館日にしているのと同様、この博物館も我々が訪問した月曜日が休館日であった。しかし、特別に職員が出勤して我々の訪問を出迎えてくれた。古代の診療風景や診療器具など貴重な資料が沢山あり、医学の発展過程を知ることができた(写真7, 8)。さらに、東洋医学ではとても重要な漢方薬のもととなる薬草の標本は見事であった(写真9)。

## 8. 中国伝統医学センターとその外来患者に対する看護師の施術所を訪問

上海中醫薬大学の附属病院2か所を視察した。1か所では、東洋医学の診療風景を視察し、もう1か所では、外来患者に対して看護師が中国伝統医学の施術(鍼灸、推拿、パップ)を行っている場面を視察した。日本でも、疾病構造の変化に伴って西洋医学だけでなく東洋医学が見直されており、医療機関で症状改善目的に導入するところが増えてきている。将来、医療機関で東洋医学に触れる可能性が高い学生たちにとって、今回の見学研修は何かを考えるきっかけになるであろう。但し、医療機関での看護師の対応については、患者のプライバシーに関して多少疑問を感じたがTCM看護師らは一生懸命施術に携わっていた。

『百聞は一見にしかず』である。学生たち個々の学びを期待しつつ、帰国の途に就いた。



写真 1



写真 2

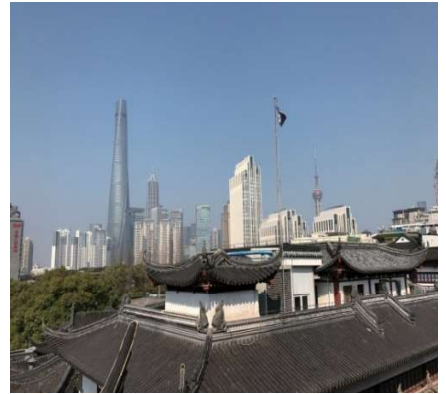


写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9